

古代官道を掘る

名子遺跡 5次調査の成果より

考古学講座・発掘調査速報編①

福岡市埋蔵文化財課

2020.11.28

配布資料



全景（西から）

古代官道を掘る

名子遺跡 5 次調査の成果より

考古学講座・発掘調査速報編①

福岡市埋蔵文化財課 神 啓崇

2020.11.28

【要旨】

▷名子遺跡第 5 次調査では、古墳時代後期の竪穴建物 26 棟以上、掘立柱建物 4 棟以上を主とする集落跡が見つかった。そのほかに奈良時代の直線的な溝を検出した。本調査区付近は古代山陽道大宰府路推定ラインにあたることから、官道側溝の可能性はある。

▷官道の整備は都・地方間の往来を活発にした。奈良時代の歌集『万葉集』には、都と地方の人びとの交流・共感を示す歌が数多く残る（上野 2020）。そのうち巻六 963 に大伴坂上郎女が詠んだ名兒山の歌がある。名兒山は宗像市名兒山のほかに、新宮・久山町の三本松山（名子山）とみる意見がある（大高 2017）。名子地区から山あいを通り、席打駅家へ向かう情景が想起される。

I. はじめに

本講座では、東区名子 3 丁目地内で発掘調査した名子遺跡 5 次調査成果を発表する。講座内容は 2 部構成とし、①名子遺跡周辺の歴史・環境と 5 次調査の成果、②調査で検出した溝が古代官道・道路側溝の可能性があると考えたうえで、研究史や周辺の発掘調査成果、踏査をふまえた内容を話す。

II. 環境・歴史

名子地区は、城越山・森江山・江辻山の間を流れる猪野川が形成した扇状地上にある。5 次調査地点は、その扇頂部から扇中央付近にあたる。

既往調査成果をもとに、名子地区の遺跡を時代ごとに概観する。名子で遺構が確認できるのは縄文時代以降である。3 次・4 次調査では、縄文時代後期の土坑、竪穴建物が出た。そのうち礫が多数入った土坑は、「調査中は人為的なものなのか、縄文時代のものなのかさえ判断できなかった」とある（今井編 2011）。最近、粕屋町戸原伊賀遺跡第 1 地点で似た土坑が見つかり、礫を取り除くと、柱痕跡を確認したため、柱穴（門？）を想定している（福島・朝原編 2019）。

名子地区の弥生時代の遺構は、3 次調査で出た前期の土坑のみで、様相は不明である。猪野川と多々良川の合流付近にある粕屋町江辻遺跡では、弥生時代早期の竪穴建物、墓、倉庫、大型建物、環溝が出た。とくに竪穴建物は、韓半島南部に起源をもつ松菊里型の円形竪穴建物で、建物中央部に長円形の穴（炉ではない）と、それをはさんで相対する 2 本の柱穴をもつ特徴がある。また、青葉地区では青銅器銅剣鑄型の出土に注目できる。調査による発見ではなく詳細は不明だが、香椎や八田地区でも鑄型は出ており、鑄造遺構（青銅器工房跡）の存在が想定される。青葉中学校内の椀ノ谷遺跡では甕棺が 2 基出た（山崎 1991）。

古墳時代は、集落の様相は不明だが古墳は確認できる。森江山南麓の天神森古墳では、三角縁神獣鏡、盤龍鏡が出ている。古墳は道路建設によって分断されたが、全長 50m 程の前方後円墳の可能性はある。また、「名子道」交差点付近の丘陵には名子道遺跡があり、石棺墓が出た。青葉地区には三留古墳群、湯ヶ浦古墳群がある。湯ヶ浦古墳群は 1970 年代に調査され、後期古墳と製鉄遺跡が出たという。名子遺跡 1 次調査では、古墳時代後期以降の溝が出たが、集落の広がりなどはわかっていない。

古代から中世の遺構は未確認だが、戦国期には土造りの城砦が三日月山・城之越山に築かれる。立花山を巡る攻防における陣所とみる意見がある（藤野・山崎 2014）。近代では、昭和 23 年に名子地区の 4 km 先で麻生鉱業が山田炭坑を開いている。索道支柱は現在でも確認できる。

以上を踏まえれば、名子地区では縄文時代後期～弥生時代中期、古墳時代中期以降の生活痕跡が確認できる。



Ph 1 名子周辺の遺跡
 A 名子3次・縄文時代の竪穴建物（今井編 2011）
 B 椀ノ谷1次・甕棺墓（センター所蔵写真）
 C 名子道古墳（田坂ほか編 1972）
 D 山陽新幹線調査・名子地点（塩屋・折尾編 1974）
 E 湯ヶ浦古墳群（センター所蔵写真）
 F 伝多々羅出土の鋳型（後藤編 1978）
 G 天神森古墳・三角縁神獣鏡（長家編 2000）

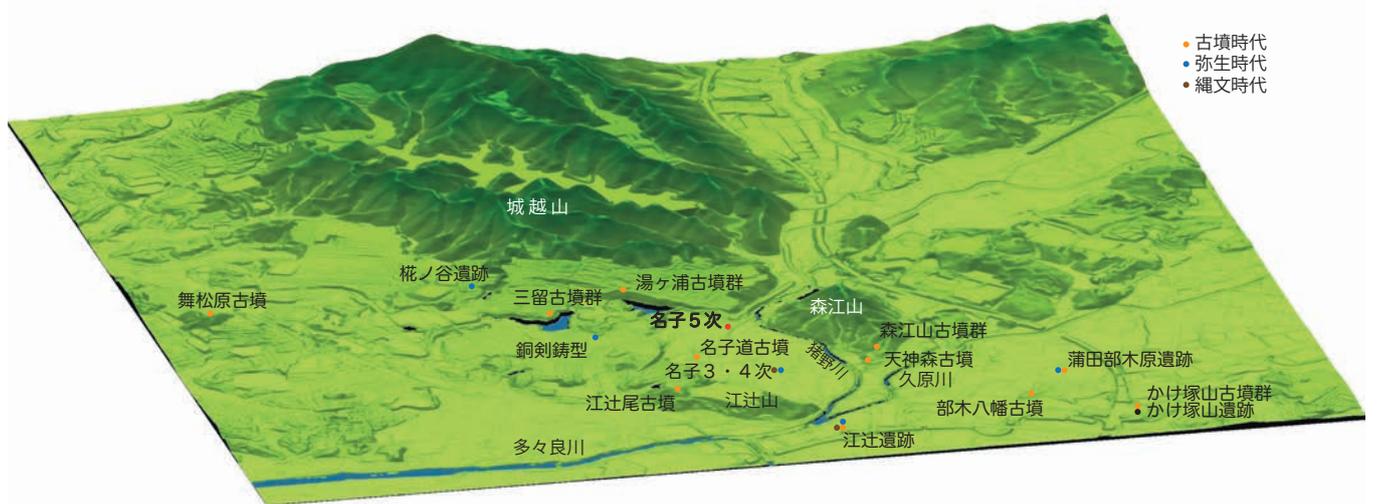


図1 名子周辺の地形と遺跡立地（国土地理院地図をもとに作成）

Ⅲ. 調査成果と所見

店舗建設に伴い、2020年1月20日から5月29日まで2219㎡を発掘調査した。現況は水田で、周囲の道路面より1m弱低い。水田床土の直下で黄褐色細砂～シルト質土となり、その上面で遺構を検出した。黄褐色細砂～シルト質土は黄砂（レス）の堆積層で（溝田ほか1992）、その下層で河川堆積の砂利・小礫を確認している。遺構は、古墳時代後期を主とする竪穴建物26棟以上、掘立柱建物4棟以上、柱穴・土坑多数を確認した。遺物総数はパンケース30箱程度で、土師器・須恵器・石製品などが出土した。粕屋地域でよく出る須恵器系土師器（赤焼須恵器）も出ている。特に甕が多い。

古墳時代後期の竪穴建物は床面まで5～10cm程しか残っておらず、削平を受ける。平面形は隅丸方形で4本主柱穴、北西・西壁中央にカマドを敷設する。竪穴建物SC250のカマド焚口には須恵器坏身があり、須恵器は2次的に火を受けていないため、カマド廃棄後の祭祀と思われる。また、SC060は排水溝付き竪穴建物で、近隣では蒲田部木原遺跡で出ている。韓半島の栄山江流域を中心とする馬韓地域からの影響とみる意見がある（重藤2020）。掘立柱建物は2間×2間の総柱建物で、倉庫だろうか。基本的に竪穴建物と同方向をとる。竪穴建物・掘立柱建物など集落の最盛期は古墳時代後期で、丘陵上の湯ヶ浦古墳群と概ね時期があう。これら古墳に対応する集落と考える。

溝は6本検出し、2本は奈良時代で北東－南西方向に並行して延びる。そのうち、溝SD150はより直線的で、本調査区付近が古代山陽道大宰府路推定ライン上にあたることから、官道側溝の可能性はある。ただし溝は1本のみで、対になる側溝や波板状凸面は未確認で検討の余地がある。また仮に官道である場合、その存続時期や、敷設替えの有無など議論すべき課題点が多い。ところで、官道の整備は都・地方間の往来を活発にした。その影響は文献にもあらわれており、奈良時代の歌集『万葉集』には、都と地方の人びとの交流・共感を示す歌が数多く残る（上野2020）。大伴旅人の異母兄妹である大伴坂上郎女の歌に名兒山の歌がある。冬十一月、大伴坂上郎女の、帥の家を發し上道して、筑前國宗形郡名兒山を越ゆる時に、作る歌一首
大汝 少彦名の 神こそは 名づけ始めけめ 名のみを 名兒山と 負いて わが戀の 千重の一重も 慰めなくに（『万葉集』卷六963）

歌にある名兒山は宗像市名兒山のほかに、新宮町・久山町の三本松山（名子山）とみる意見がある（大高2017）。名子地区から山あいを通り、席打駅家へ向かう情景が想起される。



Ph 2 名子遺跡第5次調査全景（東から）



Ph 3 名子遺跡第5次調査全景（西から）



Ph 4 溝SD115（左）・150（右）（西から）



Ph 5 溝SD150 遺物出土状況（西から）



A



B



C



D



E



F

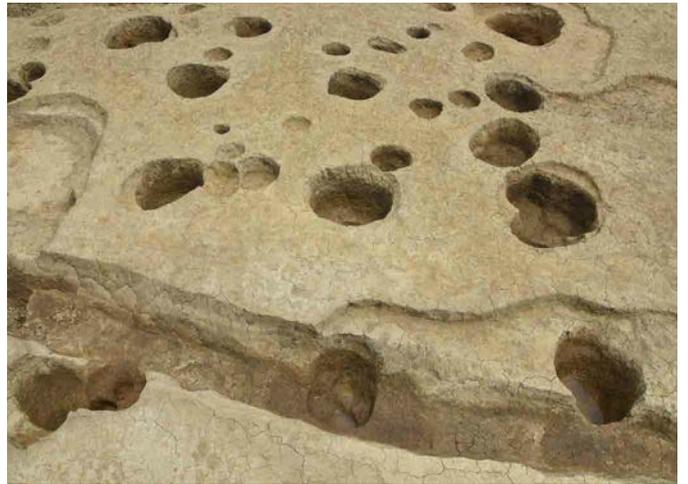
Ph 6 名子遺跡5次調査・遺構個別写真

- A 竪穴建物 SC250 カマド出土状況 (南西から)
- B 竪穴建物 SC250 完掘 (南西から)
- C 竪穴建物 SC120 完掘 (南東から)
- D 竪穴建物 SC120 掘方完掘 (南東から)
- E 竪穴建物 SC220 完掘 (南西から)
- F 竪穴建物 SC220 掘方完掘 (南西から)

- G 掘立柱建物完掘 (北西から)
- H 掘立柱建物完掘 (北西から)
- I 掘立柱建物 SB270 完掘 (南東から)
- J 土坑土器出土状況 (北西から)
- K 溝 SD030 掘削状況 (南西から)
- L 溝 SD030 完掘 (北東から)



G



H



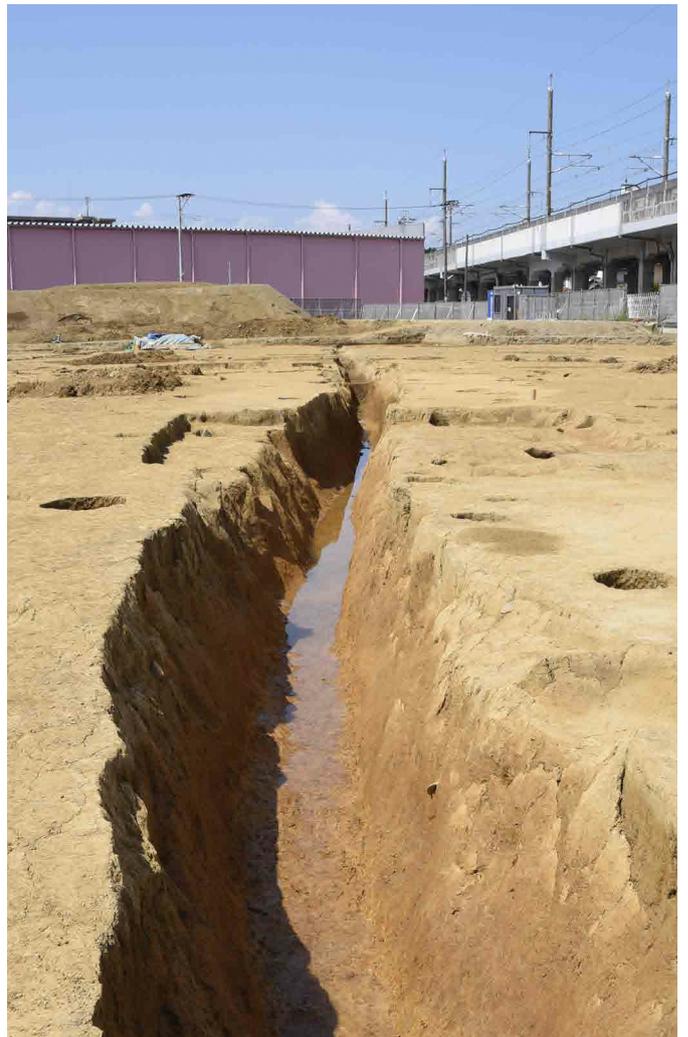
I



J



K



L

IV. 官道とは

官道は、7世紀後半以降に律令制下における物流・情報通信網の整備を目的として敷設された道路である。都と地方拠点を最短距離で結ぶ駅路、郡役所を結ぶ伝路からなる。とくに駅路の成立時期は天智朝期とみる意見、天武朝期とみる意見がある（近江 2016）。駅路は大・中・小路に区分され、そのうち都と大宰府を結ぶ山陽道は大路にあたる。

発掘調査では、並行する直線的な側溝や波板状圧痕（道路造成痕跡）などが見つかる。大路・中路は幅 12m 以上、小路は 6～9m 程度が多い。最近では、官道の景観復元も進展している。鳥取県青谷横木遺跡では、古代山陰道に沿って築かれた盛土で検出した樹木根を樹種同定し、柳と判明したという（中村 2017）。なお、福岡市内の発掘調査では 20 例以上の道路痕跡が見つまっている（小林編 2012 など）。

V. 山陽道大宰府路の検討—夷守駅家・席打駅家間—

(1) 検討路線に関わる研究略史

官道のうち、山陽道大宰府路、とりわけ夷守駅家から席内駅家間の研究史を簡単にまとめる。戦前は『延喜式』を中心とする文献の記述をもとに駅家・駅路を推定する検討が進められた。戦後は、歴史地理学では、糟屋郡の山陽道大宰府路推定線は各研究者の意見が概ね一致し、粕屋町戸原・内橋—福岡市東区土井・名子—久山町山田—新宮町立花口—古賀市青柳を通るとみる。ただし、詳細な路線は研究者によって異なる。文献史学では、大高広和が『万葉集』（巻六 963）にある「名児山」を検討し、近世以来の宗像市名児山説を見直し、①古代の宗像郡内、②官道ルート沿い、③名児山の別称をもつ三本松山を「名児山」と想定した（大高 2017）。考古学では夷守駅家（内橋坪見遺跡）・糟屋評衙（国史跡阿恵官衙遺跡）など、粕屋町の発掘調査成果が大きい。内橋坪見遺跡では大型掘立柱建物を検出し、大宰府式鬼瓦や赤色顔料が着いた軒平瓦が出ている（西垣 2014）。また、阿恵官衙遺跡検出では伝路を検出し、溝心幅 21m である（西垣 2015・西垣編 2018）。本資料末尾に検討路線に関わる先行研究を挙げる。

(2) 検討

踏査と道路痕跡の発見 2020.07.05 6:45 JR 土井駅発—9:15 席内駅家推定地着（古賀市青柳八反田付近）、土井 4 丁目切通から席打駅家推定地まで踏査。

東区大字名子 221-1（（株）浪花商事共和さん土場）の西隣、砂利道の西側に、道路に並行する空間地がある。砂利道に並行して、山際に一段高い空間地を確認した。「道路に沿った細長い地割（空き地・耕地・池・住宅列・駐車場 e t c）」が「想定路線に沿って見つければ、古代道路復原の有力な根拠となる」という（中村 2001）。

官道推定線 今回の踏査では三本松山の西を通るルート（大高説：大高は木下 1997 を元にしたようだが、木下は東を通るルートを提示している。）を歩いた。東を通るルート（木下説）の方が平地で、新宮町立花口「佐屋」、古賀市青柳「才崎」など、塞の神地名がある。

塞の神地名 古賀市には、塞の神地名として、左谷（筵内）、左谷（久保）、社ノ元（米多比）、さやのもと（小山田）、佐谷元（青柳）、才崎（青柳）、才木（小竹）があるという（村山 1997）。

「古賀町の地名 さやのもと さや、さい 古賀町の小字名、俗名の中に塞神、障神、才神（サイノカミ又はサエノカミ）に関係のある地名が上図のようにあります。古賀ではサイ、サエをサヤと発音したようです。社の元（米多比）さやのもと（小山田）佐谷元（青柳）佐屋（久保）左谷（筵内）には「さえのかみ」を祭ったあとがあります。サエノカミはイザナギノミコトがイザナミノミコトをヨミノクニにたずねてにげかえったとき追いかけて来たヨモツシコメをサエギリ止めるためになげたツエから生れた神でワザワイの侵入をサエギリ止める神として、村の入口、道の辻、峠などに祭りました。」（村山 1997：p.7）

「サヤ」、「サヤノマエ」は、疫神悪霊の侵入を防ぐために、峠や村境に塞の神が祀られていたことに由来する（木本 2013：pp.272-274）。青柳の小字才崎は、席打駅家推定地付近を通る官道に関わる地名の可能性が大きい。また、新宮町大字立花口字佐屋も検討の余地がありそうだ。

席打駅家推定地 先行研究によれば、席打駅家推定地は「八反田の古瓦」の記録をもとに（浅島武幹編 1940『青柳村誌』）、古賀市八反田付近とみる意見が主流である（木下 1997 など）。福岡県分布地図には八反田近隣に「踊ヶ浦廃寺」（250135）が登録されている。浅島武幹によれば、「踊ヶ浦ト云ヘル所アリ口碑ノ伝フル所ニヨレバ往昔此地ニ長者アリテ踊ノ場所ニ使用セシ所ナリト称スレドモ果シテ如何ニヤ」（浅島編 1940：pp.381-382）とあり、駅家での饗応の場を想起させる地名である。また、南の青柳篠林地区遺跡では 7 世紀後葉～8 世紀の掘立柱建物群を検出した。駅家を管理経営する駅戸は駅家の近隣に集住したとみる意見があり（永田 2004）、駅戸集落の可能性も考慮すべきだろう。

V. 結語

要旨参照。今後の検討で報告内容に変更が生じる場合がある。

参考・引用文献 県：県立図書館、市：市立図書館、セ：福岡市埋蔵文化財センターにあることをさす。

浅島武幹 1940『青柳村誌』（浅島武幹 1973『青柳村誌』古賀町文化財研究会）

井 英明編 2015『青柳篠林地区遺跡の調査（瓜尾・梅ヶ内古墳群と古代遺跡の調査報告）』（古賀市文化財調査報告書第 66 集） 県・市・セ

伊東尾四郎編 1936「一二. 明治十五年字小名調」『福岡縣史資料』6 pp.531-635 県・市

今井隆博編 2011『名子遺跡 1』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1123 集） 県・市・セ

上野 誠 2020『万葉集講義』（中公新書 2608） 市

近江俊秀 2016『古代日本の情報戦略』（朝日選書 953） 県

大庭康時 2001「福岡市内検出の古代・中世道路遺構について」『博多研究会誌』9 pp.21-31 県・市・セ

折尾 學編 1996「付録 1. 香椎 A 遺跡第 1 次」『蒲田・水ヶ元遺跡：香椎 A 遺跡第 1 次：梅ヶ崎遺跡：博多遺跡群第 23 次』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 491 集） pp.89-92 県・市・セ

上角智希編 2002『高畑遺跡—第 18 次調査—』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 699 集） 県・市・セ

岸本道昭 2006『山陽道駅家跡』（日本の遺跡 11）同成社 市

岸本道昭 2017「山陽道の駅家と関連遺跡群」鈴木靖民・荒木敏夫・川尻秋生編『日本古代の道路と景観—駅家・官衙・寺—』八木書店 pp.453-473 県

木下 良 2013『日本古代道路の復元的研究』吉川弘文館 県・市

木本雅康 2001「古代の駅家と巨人伝説」『本郷』33 pp.19-21 県・市

木本雅康 2017「古代官道と九州の巨人伝説」『海路』13 pp.68-79 県

後藤 直編 1978『銅矛と銅鐸—弥生時代の祭器とその鑄型—』（福岡市立歴史資料館図録第 3 集） セ

小林義彦編 2012『高畑遺跡 2』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1101 集） 県・市・セ

坂上康俊 2018「阿恵遺跡の歴史的特質」西垣彰博編『阿恵遺跡』（粕屋町文化財調査報告書第 43 集） pp.110-134 県・市・セ

塩屋勝利・折尾 学編 1974『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』（福岡市第 32 集） 県・市・セ

重藤輝行 2020「古墳時代九州北部の排水溝付竪穴住居と渡来人」『福岡大学考古学論集 3—武末純一先生退職記念—』 pp.367-382

下條信行 1977「考古学・粕屋平野—新発見の鑄型と鏡の紹介をかねて—」『福岡市歴史資料館研究報告』1 pp.14-38 セ

田坂美代子・弓場紀和・藤田和裕編 1972『名子道遺跡』岡崎工業株式会社 県・市・セ

永田英明 2004『古代駅伝馬制度の研究』吉川弘文館 県・市

中村太一 2001「地理資料にあらわれた古代駅路」『古代交通研究』10 セ

中村太一 2017「2 古代の道路と景観」鈴木靖民・荒木敏夫・川尻秋生編『日本古代の道路と景観—駅家・官衙・寺—』八木書店 pp.23-61 県

- 中山平次郎（岡崎敬校訂） 1984『古代の博多』九州大学出版会 県・市・セ
- 長家 伸編 2000『部木古墳群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 623 集） 県・市・セ
- 藤野正人・山崎龍雄 2014「三日月山城砦群と城ノ越山城砦群の考察－対面する二つの巨大な城砦群－」『九州考古学』 89 pp.63-86 県・セ
- 松永通明編 2016『畦町遺跡 第 1 次』（福津市文化財調査報告書第 16 集） 県・市・セ
- 溝田智俊・下山正一・窪田正和・竹村恵二・磯 望・小林 茂 1992「北部九州の緩斜面上に発達する風成塵起源の細粒質土層」『第四紀研究』 31- 2 pp.101-111
- 村山 武 1997『ふるさとのたより』
- 山崎純男 1991「8984 椀の谷遺跡第 1 次（KND- 1）」『福岡市埋蔵文化財年報』 4 p.101 県・市・セ
- 山村信榮 1993「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学』 68 pp.65-81 県・セ
- 吉留秀敏 2009「鴻臚館から大宰府への道－水城西門ルート福岡市内探索の中間報告－」『市史研究 ふくおか』 4 pp.150-138(1-13) 県・市・セ

山陽道大宰府路一夷守駅家・席打駅家間一の先行研究文献リスト

戦前

- 青柳種信 『筑前国続風土記拾遺』 県・市・セ
伊藤常足 『太宰管内志』 県・市
藤井甚太郎 1909「王代筑紫驛路考」『歴史地理』14-6 pp.38-44 県・市
中山平次郎 1914a「三野城址と推定すべき一遺蹟（上）」『考古学雑誌』4-9 pp.526-541 県・市
中山平次郎 1914b「三野城址と推定すべき一遺蹟（下）」『考古学雑誌』4-10 pp.591-606 県・市
中山平次郎 1914c「朝鮮式山城址の発見」『歴史地理』23-4 県・市
中山平次郎 1914d「三野城址推定に関し谷井学士の示教に答ふ」『考古学雑誌』4-11 pp.655-675 県・市
中山平次郎 1914e「三日月山城址と基肄城址」『考古学雑誌』4-12 pp.725-731 県・市
藤井甚太郎 1914「三野城趾等に就きての私疑」『考古学雑誌』5-1 pp.14-16 県・市
中山平次郎 1914g「三野城址等に就て藤井学士の示教に答う」『考古学雑誌』5-3 pp.185-194 県・市
中山平次郎 1927a「古代の博多（六）」『考古学雑誌』17-3 pp.11-27 県・市
中山平次郎 1927b「古代の博多（七）」『考古学雑誌』17-4 pp.1-17 県・市
野々口永二郎 1932a「王朝時代に於ける西海道の驛路」『筑紫史談』56 pp.41-50 県・市
野々口永二郎 1932b「王朝時代に於ける西海道の驛路（二）」『筑紫史談』57 pp.18-31 県・市
野々口永二郎 1933「王朝時代に於ける西海道の驛路（三）」『筑紫史談』58 pp.32-39 県・市
野々口永二郎 1934a「王朝時代西海道驛路の一部及び其二三驛に就て（上）」『筑紫史談』62 pp.30-34 県・市・セ
野々口永二郎 1934b「王朝時代西海道驛路の一部及び其二三驛に就て（下）」『筑紫史談』63 pp.19-30 県・市
久保山善映 1933「太宰府を中心としたる王朝時代西海道の一驛路に就いて」『筑紫史談』60 pp.21-35 県・市

戦後

①歴史地理学

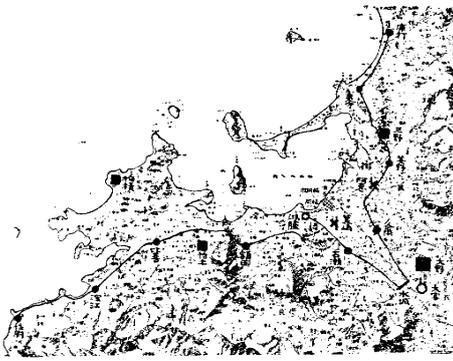
- 高橋誠一 1979「第一節 筑前国」藤岡謙二郎編『古代日本の交通路Ⅳ』大明堂 pp.1-21 県・市
日野尚志 1987「西海道における大路（山陽道）について」『九州大学文学部九州文化史研究所紀要』32 pp.187-224 県・市・セ
木下 良 1999「第三章 律令制下における宗像郡と交通」『宗像市史 通史編 第二巻 古代・中世・近世』pp.161-221 県・市
日野尚志 2005「比恵・那珂遺跡群を中心にして諸問題を考える」長家伸編『那珂38』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第842集）pp.21-36 県・市・セ
島方洗一編 2009『地図でみる西日本の古代』平凡社 県・市
木下 良 2009「1 筑前国（図Ⅷ-1）」『事典 日本古代の道と駅』吉川弘文館 pp.292-302 県・市
木本雅康 2003「西海道における古代官道研究史—歴史地理学の立場から—」『古代交通研究』12 pp.3-20 県・市・セ
木本雅康 2013「第1章 地理資料からみた古代驛路」『新修福岡市史—特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』pp.271-279 県・市・セ
木本雅康 2015「西海道の古代官道」『海路』12 pp.6-21 県・市

②文献史学

- 大高広和 2017「古代宗像郡郷名駅名考証（三）」『沖ノ島研究』3 pp.1-12 県・市
大高広和 2018「太宰府成立前後の大宰府・豊前間の交通路」『大宰府の研究』高志書院 pp.425-441 県・市

③考古学

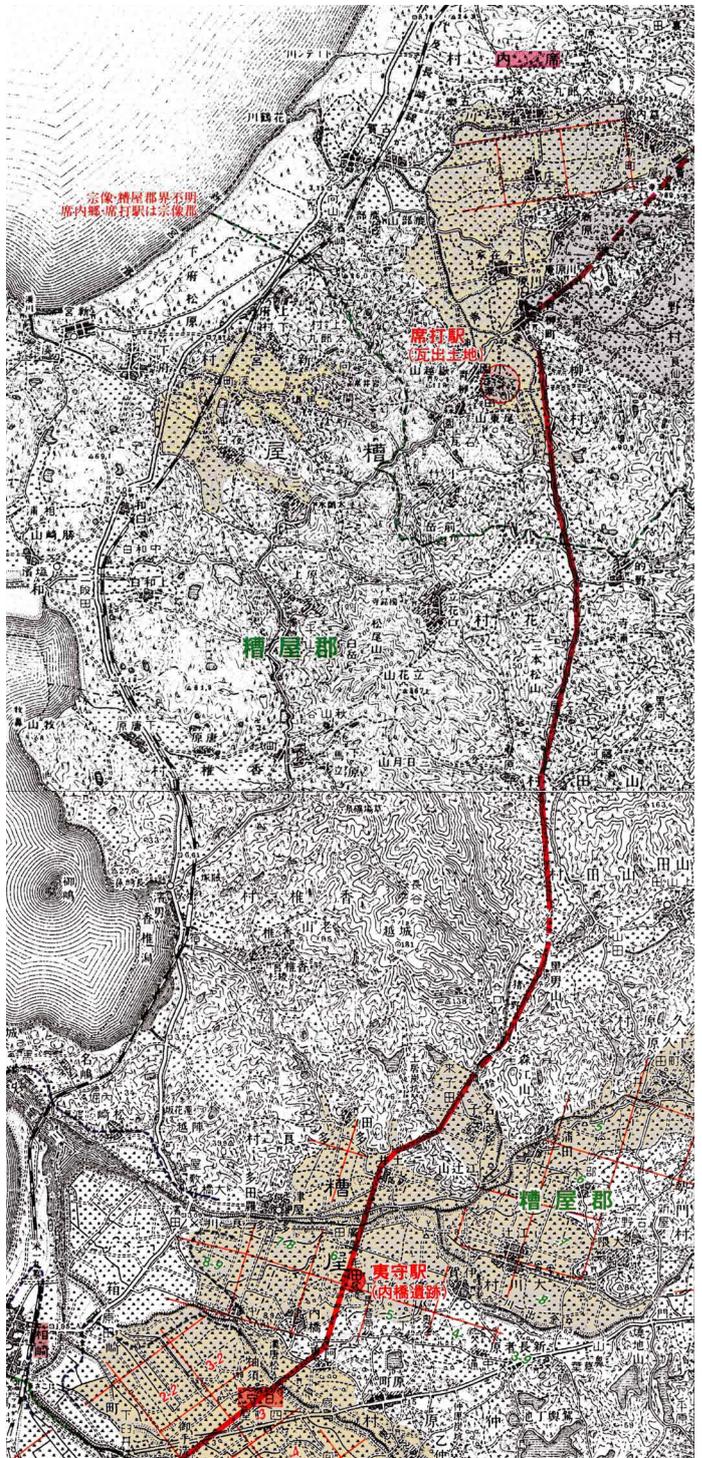
- 山村信榮 2004「筑前国」古代交通研究会編『日本古代道路事典』八木書店 pp.322-326 県・市
西垣彰博編 2013『内橋坪見遺跡概要報告書』（粕屋町文化財調査報告書第35集） 県・市・セ
西垣彰博 2014「福岡県糟屋郡粕屋町の内橋坪見遺跡について」『国士舘考古学』6 pp.105-120
西垣彰博 2015「官道にみる夷守駅と糟屋郡家」『海路』12 pp.82-94 県・市
西垣彰博編 2015『内橋坪見遺跡3次』（粕屋町文化財調査報告書第38集） 県・市・セ
西垣彰博 2017「5 福岡県内橋坪見遺跡と阿恵遺跡—夷守駅と糟屋郡（評）衙—」鈴木靖民・荒木敏夫・川尻秋生編『日本古代の道路と景観—駅家・官衙・寺—』八木書店 pp.173-178 県
西垣彰博編 2018『阿恵遺跡』（粕屋町文化財調査報告書第43集） 県・市・セ



圖置配驛古面方博多
中山平次郎 1927a



第4圖 津日駅家～久爾駅家
高橋誠一 1979



島方洗一編 2009 を改変



圖224 夷守駅～席田駅間の想定駅路
木本雅康 2013

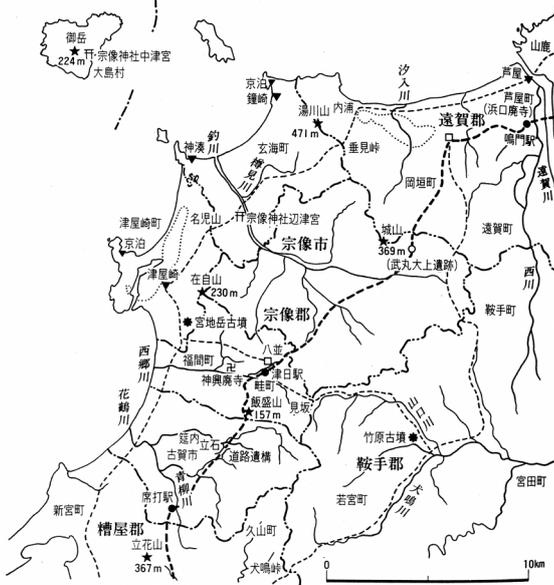
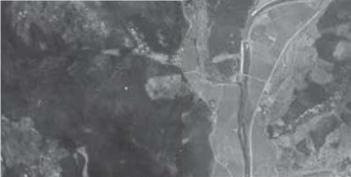
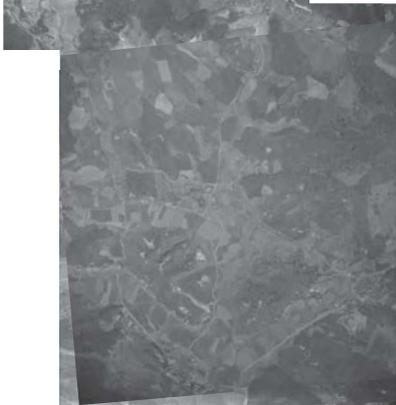
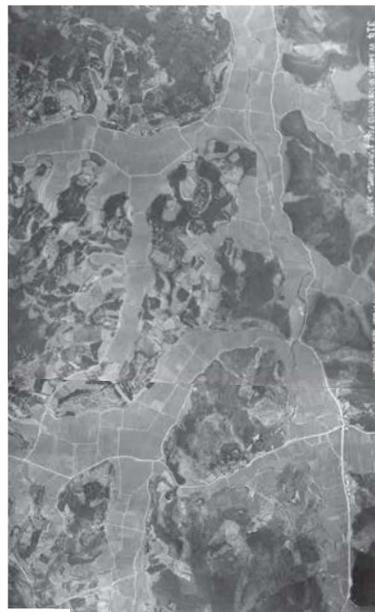
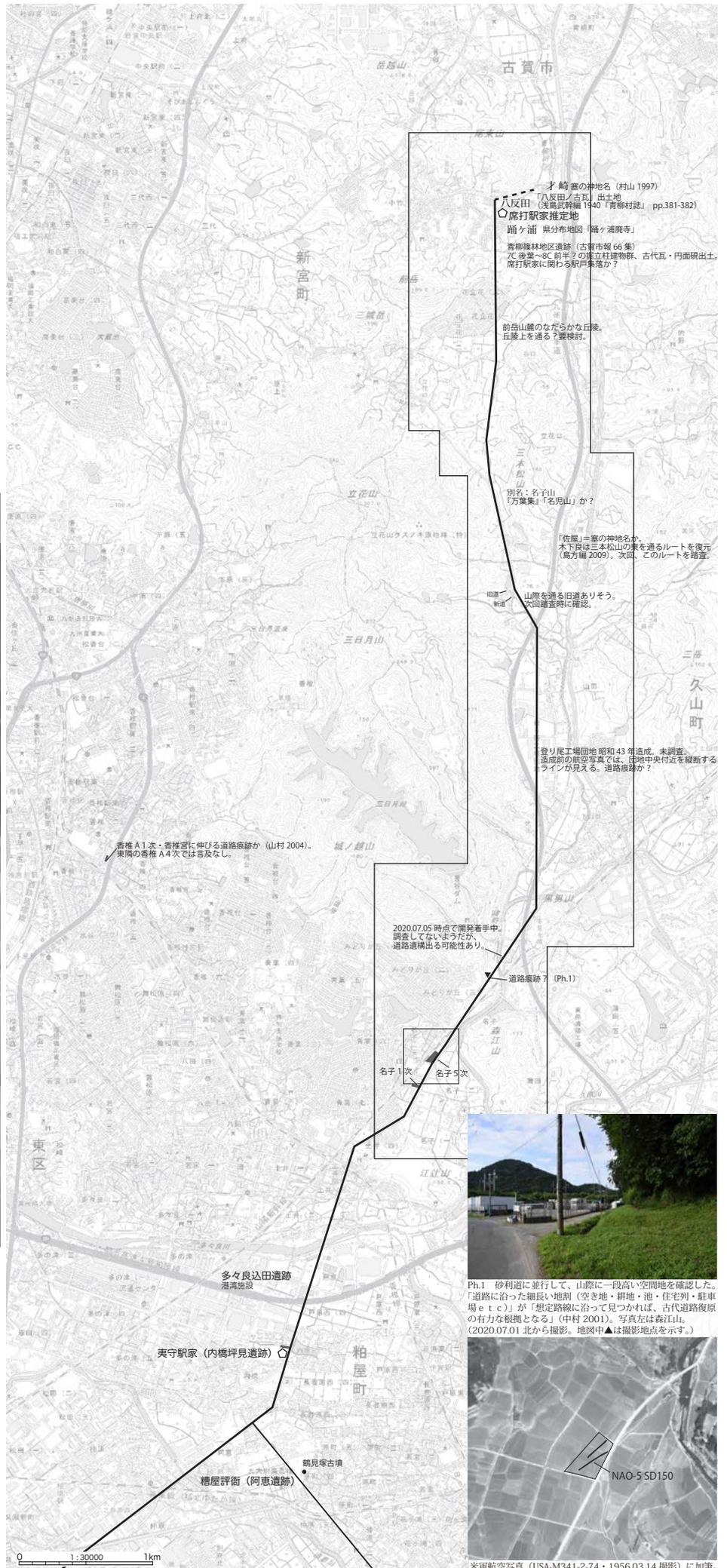


圖33 宗像郡とその周辺の古代交通路
木下 良 1999



図三 古代宗像郡の地形と範囲
※カシミール3Dにより作成（スーパー地形セットおよび国土地理院地図の混合。標高は2倍に強調した表現）
大高広和 2017

先行研究の山陽道大宰府路



米軍航空写真 (USA-M341-2-74 ほか) を修正し合成。



Ph.1 砂利道に並行して、山際に一段高い空間地を確認した。
 「道路に沿った細長い地割 (空き地・耕地・池・住宅列・駐車場
 等)」が「想定路線に沿って見つければ、古代道路復原
 の有力な根拠となる」(中村 2001)。写真左は森江山。
 (2020.07.01 北から撮影。地図中▲は撮影地点を示す。)



米軍航空写真 (USA-M341-2-74・1956.03.14 撮影) に加筆。

山陽道太宰府路 (夷守駅家-席打駅家間) の推定ライン (神 2020.07 案)



調査風景（西から）

古代官道を掘る

名子遺跡 5次調査の成果より

考古学講座・発掘調査速報編①

福岡市埋蔵文化財課 神 啓崇

2020.11.28

所在地	東区名子三丁目地内
調査面積	2219㎡
調査期間	令和2年1月20日～令和2年5月29日

発掘調査でわかったこと

名子遺跡は、猪野川が形成した沖積地上に立地し、縄文時代から古墳時代の遺跡です。今回の調査では、古墳時代後期（約1400～1500年前）の竪穴住居28棟、倉庫（掘立柱建物：ほったてばしらたてもの）3棟以上を中心とする集落が見つかりました。周辺には森江山古墳群や湯ヶ浦古墳群があり、それらのお墓に対応する集落と考えます。このほか、奈良時代（約1300年前）の溝が複数見つかり

ました。今回の調査区は官道（かんどう：奈良時代に国が整備・管理した幹線道路）山陽道の推定線上にあたり、これらの溝は道路側溝の可能性がります。

名子地区周辺の調査数は少なく、今回の調査で古墳時代集落の一端や、官道側溝が見つかったことは大変重要な成果と言えます。

住まい 竪穴住居（たてあなじゅうきょ）

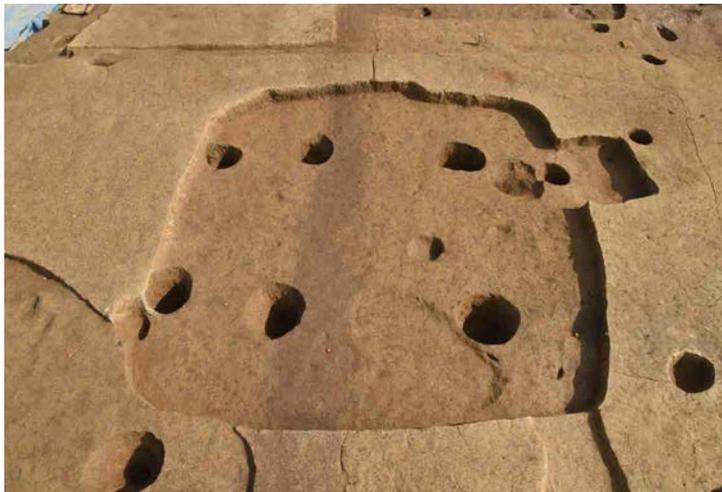
総数28棟見つかりました。そのうち26棟は古墳時代後期の住居で、壁際にはカマドを造り付けています。使わなくなったカマドに須恵器を置き、お祀りをした住居もありました（Ph.1）。Ph.4は住居中央に炉があるタイプの住まいです。



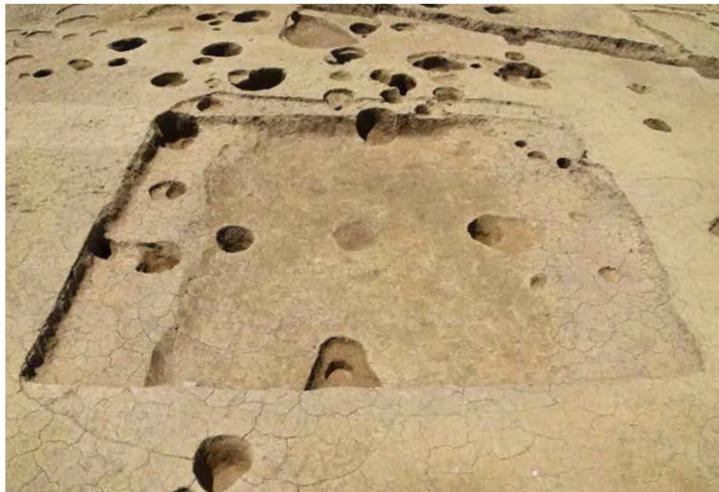
Ph1. 竪穴住居 SC250 カマド出土状況(南から)



Ph2. 竪穴住居 SC250 完掘(南から)



Ph3. 竪穴住居 SC090 掘方完掘(南から)



Ph4. 竪穴住居 SC350 完掘(東から)

倉庫 掘立柱建物 (ほったてばしらたてもの)

地面に穴を掘って柱を立てる建物で、等間隔に柱穴が並ぶ建物が複数見つかりました。倉庫跡と考えます。調査区東側に竪穴建物が集中するのに対して、掘立柱建物は西側にあり、東側は居住スペース、西側は穀物や道具などを保管するスペースだったようです。

溝

溝は6本見つかりました。そのうち2本は奈良時代のもので、建物よりも新しい時代につくられました。山陽道大宰府路側溝の可能性がありますが。



Ph5. 掘立柱建物 SB270 検出 (東から)



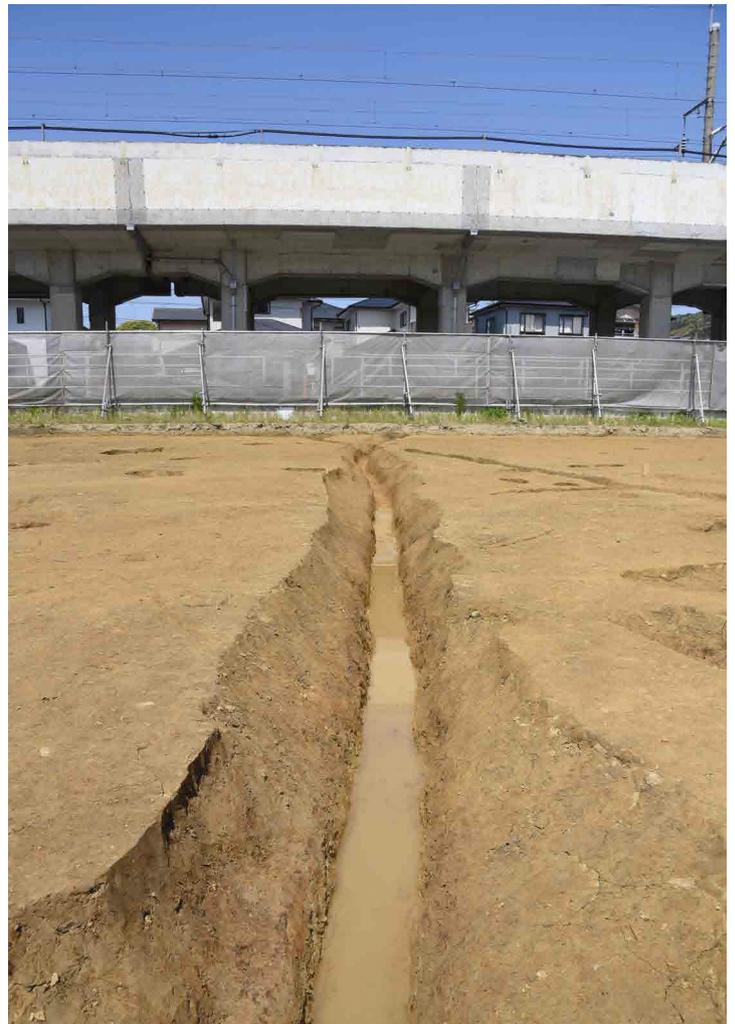
Ph7. 溝 SD115・150 完掘 (南から)



Ph8. 溝 SD150 出土状況 (南から)



Ph9. 溝 SD195 完掘 (南西から)



Ph9. 溝 SD195 完掘 (南東から)